

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370302

研究課題名(和文) アイルランドと日本における伝承文学教育の文化創造可能性についての比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of the Formation of Cultural Identity and the Education of Myths and Folktales in Ireland and Japan

研究代表者

高橋 美帆 (TAKAHASHI, Miho)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：70342532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アイルランド伝承文学教育の与える現代文化への影響と未来の文化形成への可能性を探り、また日本とアイルランドの伝承文学の類似にも着目し、子ども文化への影響や文化創造の可能性という点から、日本の伝承文学を取り入れた教育を提唱するものである。アイルランドでは教育現場でのインタビューとアンケート調査を行い、日本ではそれを参考にしたうえでのアンケート調査を行って、両国の伝承文学教育について比較・検討した。加えて、講演会や語りの会の開催や、小・中学校での語りの公演、伝承を語りなおしたアイルランド語教材の翻訳・出版を通して、十分な業績と成果を上げることができた。

研究成果の概要(英文)：This research project is on how Irish people gain an 'Irish identity' from their education, to find out if education of Irish myths, legends, and folktales has a role in the feeling of identity, and aims to propose an educational use of Japanese myths and folktales in the current Japanese school curriculum, as a possible method of growing a cultural identity in children. Our survey of the use of myths and folktales in the school curriculum was conducted both in Ireland and in Japan, through a questionnaire for school teachers, Irish language teachers, parents, and university students majoring in literature. As a whole, its results seem to indicate a close relationship between the formation of a national or cultural identity and the folklore education, when supported by the appropriate school curriculum and provided with proper folktale books retold for children.

研究分野：人文学

キーワード：アイルランド 伝承文学教育 アイデンティティ 自然環境

1. 研究開始当初の背景

明治以来、アイルランド文学作品は様々な形で日本でも紹介されてきたが、それは「英訳」を通してであった。20世紀後半になってようやく、原語で書かれたテキストが読まれるようになった。詩、伝説、歴史については、日本国内において限られた機会ではあるが、原語の一次資料から読み解く研究が続けられている。しかし、全般的にはアイルランド語を学ぶ研究者数が少ないため、英訳のない作品には関心が向けられない傾向がある。

しかし、現代アイルランド語で書かれた物語や童話の中には、アイルランドの伝説や民話が再構成され伝承されているものが多くあり、現地では「我々の物語」として広く読まれている。アイルランド政府は20年戦略(20-year Strategy for Irish Language 2010-2030)を立て、減少傾向にあるアイルランド語話者を増加させようとし、実際の教育現場では、たとえばアイルランド語童話作家であり教育者のコルマーン・オラハリーは、アイルランドの伝説『トーン』(An Tain)をはじめとした民話や伝説を現代アイルランド語で平易に書き直し、アイルランド語を学ぶための教材として普及させてきた。こうした現代アイルランドにおける伝承文学の状況に関する研究は、日本では未開拓であるといっても過言ではなく、作品の翻訳もほぼなされていない。また伝承文学作品がアイルランドの教育現場で果たしている役割についての調査はなく、アイルランド国内においても系統だった研究は未熟であった。

加えて、アイルランドと日本は民族や歴史は異なるものの、同じ島国であることからか、自然崇拝や地霊信仰という点も含め、アイルランドと日本の伝説・民話にはかなりの類似性が見られる。たとえばアイルランドの語り部で童話作家のエディ・レニハンがレコーダーを手にアイルランドの老人たちから直接収集した民話作品 *Meeting the Other Crowd* (2003) の中には、『遠野物語』に収録されている話と非常に似通ったものが見られる。

そこで、アイルランドの事例やそれとの比較を参考にして、日本でも伝承文学作品を用いた言語・文化教育を提唱すれば、次世代を担う日本の子供たちに伝統への敬意や自然への関心を呼び覚ますような教育成果を導くことができるのではないか、という期待が生まれ、今回の申請に至った。

2. 研究の目的

本研究は、特に広義での教育に焦点をあて、アイルランド語で書かれた伝承文学作品の現代アイルランド文化への影響と、未来の文化形成への可能性を包括的に探ったものである。またアイルランドと日本の伝承文学の類似にも着目し、アイルランドの例を参考にしながら、日本の伝承文学を取り入れた児童文学作品が与える子ども文化への影響や、文化創造の可能性を探ろうと試みた。

具体的には、アイルランドの学校教育の場で、アイルランド語で書かれた物語や童話が言語習得のみならず伝統文化継承にも与えている影響を、インタビューやアンケートなどの現地調査を通して探った。その調査結果を参考にしながら、日本においても同様の調査を行った。また日本では、「おはなし」の体験の少ない学生や子どもを主たる対象として、アイルランドのプロの語り部(シャナビ)や日本の民間の「おはなしの会」を招いて、講演会や公演を催し、伝承を実際に共有する場を設け、その機会をもとにさらなる調査を進めた。同時にアイルランド語の伝承文学作品教材を日本語に翻訳したうえ、出版物や紙芝居に仕上げ、日本での公演の際に活用した。

加えて、アイルランドにおけるアイルランド語の状況がもつ意味を照らし出すために、同じケルト圏にあり英語圏ではないフランス・ブルターニュ地方のブルトン語の現状を補足的に参照した。

このように本研究は、アイルランドの伝承文学教育に主眼を置きながら、そこからさらに日本の学校教育を振り返り、伝統文化の継承や自然環境を尊ぶような価値観の育成などを旨とした、伝説や民話を使った新たな教育方法の開発やその発展の可能性を提唱するものである。

3. 研究の方法

本研究を遂行するための活動は、アイルランドでの伝承文学教育に関する現地調査、日本での講演会・公演等を通じた啓蒙活動、アイルランド伝承文学をテーマとした児童文学作品の初邦訳の出版、アンケートの実施と分析など、アイルランドと日本でのフィールドワークが中心となる。

(1) アイルランドでの調査

伝承文学の学校教育への導入と影響について、現地実態調査と資料収集を行う。アイルランド語童話作家でありメイヨー県の小学校長を務めたコルマーン・オラハリーや、夫婦共に教員を務めた語り部エディ・レニハンの協力を得て、現地関係者との連携を生かしてアイルランドの教育省や学校を訪問し、教育現場での伝承文学の効用や言語教育での有効性などを調査する。日本では中等教育での教育経験者である研究協力者を中心として、同様の調査を行う。

(2) 講演会と公演の開催

アイルランド語童話作家・教育者のコルマーン・オラハリー、語り部(シャナビ)・妖精物語作家のエディ・レニハンを招聘して、大学、小・中学校、図書館、大使館等、できるだけ多くの場を設けて、伝承文学教育に関する講演会やシンポジウム、「おはなし」の公演を開催する。アイルランドの民話と日本の民話の比較という観点からも、講演や「おはなし」の内容を掘り下げて、日本の聴衆の関心を促す機会とする。

(3) 伝承文学の影響を受けたアイルランド語児童文学作品の共同翻訳と出版

日本ではまだ知られていないアイルランド語児童文学作品の精読、翻訳を行う。研究協力者が主催する奈良アイルランド語研究会ではアイルランド語で書かれた伝説や童話を精読してきた。それらを平易な日本語に訳して、完成させた翻訳は解説付で出版する。日本の子どもたちを対象に、アイルランドの伝説を通してアイルランド文化を紹介するとともに、日本の伝説や民話と通じる点を解説する。そして、伝承文学教育における翻訳の可能性を探るとともに、それらが現代の教育に与えている影響を探る。

(4) アンケート調査

伝承文学がどのように小・中学校教育に取り入れられているのかを実地調査したうえで、アイルランド人にとってアイルランド語がもつ意義を探る。アイルランドで民話や民間伝承が人々の言語生活に与える影響を検証する。その結果をもとに、日本でも同様の調査を行う。

(5) 定期研究会

各自が分担したテーマに沿って作業を進めていく過程で、月1回会合を持ち、進捗状況を報告し合い、意見交換を行う。

4. 研究成果

平成 26 年度

研究代表者・協力者はアイルランドで現地調査および資料収集を行った。教育現場を訪問し、アイルランド語が伝承文学を用いてどのように教えられているのかの実態調査を行った。またアイルランド語で童話や妖精物語を執筆する作家や語り部たちに面会し、執筆現場の様子を見学するとともに、次年度の招聘に向けての打ち合わせを行った。現地インタビューは録音し、音声資料として残した。

アイルランドの教育省を通じて、現地教育関係者に本テーマに関するアンケート調査を、紙媒体・メール等を通じて実施した。

伝承文学の影響を受けたアイルランド語児童文学作品や関係書籍の共同翻訳を進め、出版した。出版物の取扱書店で出版記念イベントと展覧会を開催し、アイルランド伝承文学への興味と理解を深める機会を設けた。

月1～2回全体の定期研究会を開き、進捗状況を報告し合って意見交換をした。

平成 27 年度

研究代表者・分担者・協力者の主催で、アイルランドと日本の伝承文学の比較をテーマに、アイルランドより児童文学作家コルマーン・オラハリー氏と作家兼語り部エディ・レニハン氏を講師として招聘して、10月と2月に講演会、シンポジウム、公演、研究会等を開催した。会場は研究代表者と研究分担者の所属大学に加え、小・中学校、公立図書館やアイルランド大使館で、日本の教育関係者および学生に加え一般の聴講も広く歓迎し

た。同時に、各会場で、本テーマに関するアンケートを紙媒体で実施した。

伝承文学の影響を受けたアイルランド語児童文学作品や関係書籍の共同翻訳を進め、出版した。講演会や公演の際には、関係書籍や翻訳作品の展示を含むイベントと展覧会を同時開催し、アイルランドと日本の伝承文学への興味と理解を深める機会を設けた。

アイルランドと日本でそれぞれ実施したアンケート調査の分析を分担して進めるなかで、月1～2回定期研究会を開き、進捗状況を報告し合って意見や情報を交換した。

平成 28 年度

研究代表者と研究協力者はアイルランドの学校や図書館等の教育現場を訪問し、最終調査を行った。前年度招聘したオラハリー氏とレニハン氏にそれぞれ帯同し、アイルランド語によるアイルランド文学・文化・伝統を継承するための啓蒙活動に参加して、資料や情報を収集した。また現地のアイルランド語集中講座を受講し、アイルランド語伝承文学・児童文学を用いた教育現場の実態を調査した。また講座の開催校に依頼して、教員と受講生を対象とした紙媒体によるアンケート調査も行った。

また前年度に予定してテロにより延期したフランス・ブルターニュ地方におけるケルト伝承文学・文化およびブルトン語に関する現地実態調査および資料収集を行った。ブルターニュ地方はアイルランドと同じケルト文化圏に属し、多くの伝承文学が存在が知られている点で、アイルランドの状況との比較対象ないし、アイルランドの状況を相対化して客観的に理解するための参照項として設定した。アイルランド伝承文学を取り巻く状況と、ブルターニュ地方の伝承文学の置かれた状況について比較しながら、現地図書館や博物館での文献・資料調査および現地関係者のインタビューを実施した。

月1～2回定期研究会を開き、アンケート調査の分析を行って、最終報告書にまとめる作業を進めていった。また前年度に引き続き、伝承文学の影響を受けたアイルランド語児童文学作品の共同翻訳を行って出版した。

(1) アンケート調査結果について

本研究では、一般市民と教師の持つ伝承文学に対する考えと伝承文学教育の実態を明らかにするために、オラハリー氏とともに、アイルランドと日本でアンケート調査を行った。アンケート調査の対象は日本とアイルランドの初等教育の教師、日本の一般市民（大学生と講演会の聴衆）、アイルランドで初等教育を受けたアイルランドの一般市民である。結果は以下を参照されたい。

<https://drive.google.com/drive/folders/0B1DHOWrZZGvUTGIMeEJhd2oyWG8?usp=sharing>

一般的にアイルランドでは、伝承文学はアイルランドの文化遺産で、歴史を反映すると

考えられていて、伝承文学教育が必要ととらえられていることが分かった。一方、日本の調査回答では伝承文学を教育で伝えることへの疑問が呈された。アイルランドの調査結果には伝承文学教育を疑う回答はなかった。このことからアイルランド人は概して伝承文学教育を当然のものに見なしていると言えるかもしれない。

伝承文学教育は十分になされているか、については、日本の一般市民の83.0%(253名)が十分に受けたと思っていない。概して日本の伝承文学教育は十分になされていない、と教育を受けた側が感じていることが分かった。これに対して、アイルランドの一般市民の調査では伝承文学教育が十分なされていたと感じる人の割合がそう感じない人の割合より概して多い。さらに学校でもっと教えたほうがいいのかの問いに「はい」が26回答(49.1%)、「いいえ」が6回答(11.3%)見られる。さらに、教師の8割も月に1度ほど伝承文学教育を行う現状では少ないと感じている。アイルランドでは伝承文学教育がカリキュラムに制定されているので、十分に機会がある/あったとはいえ、教育を受けた側からはもっと多くの機会を求める声が挙がっていることが分かる。

最後に、民話や神話はアイデンティティに必要不可欠と考えられているかどうかに関心を当てる。アイルランドの一般市民に「あなたは自分をアイルランド人だと思えますか」と問うたところ、程度の差はあれ自分をアイルランド人と見なしている人は92.5%に上る。伝承文学教育だけとはいええないものの、それがアイルランド人のアイデンティティ形成に貢献していると言っても過言ではない。また、「アイルランドの民話はアイルランドの文化的遺産だと思えますか」の問いに、「はい」が96.2%(51人)、「いいえ」が1.9%(1人)、「分からない」が1人(1.9%)見られた。今回調査した9割以上のアイルランド国民が伝承文学が文化的遺産と考えていることから、伝承文学はアイルランド人のアイデンティティ形成に貢献していると言える。

一方、日本人の大学生を除く一般市民は、「日本の昔話は日本人のアイデンティティ形成に必要なだと思いますか」という問いに対して、222人(72.8%)が「はい」、4人(1.3%)が「いいえ」、49人(16.1%)が「どちらともいえない」と答えた。同じ質問に、大学生は224人(50.7%)が「はい」、31人(7.0%)が「いいえ」、172人(38.9%)が「どちらともいえない」と答えた。日本の伝承文学が日本人のアイデンティティ形成に必要なと考える人の割合はそれほど高くなく、どちらでもないと考えた人が2割弱から4割弱あった。一般市民へのアンケート結果と同様に、日本人の教師たちで必要と考える人の割合もそれほど高くなく、どちらでもないと考えた人が3割あった。日本人は概して伝承文学が日

本人のアイデンティティ形成に必ずしも必要とは考えていないようである。

(2) 講演会と公演について

アイルランドから講師を招聘して、2期にわたって講演会を開催した。そこで判明したのは、奈良や京都での聴衆の多くは50代以上という年齢層だったことである。これは、若者たちに伝承文学をどのように伝え残してゆくか、という課題を突き付けられている現実でもあった。参加した若者たちには、伝承物語を次世代に話して伝えていく重要性は、納得してもらえたと思う。

一方、東京のアイルランド大使館主催の公演では、対象が幼稚園児から小学生で、保護者同伴であった。子どもたちに目の前で、生の語りを聴かせることは、語る側からも聴く側からも素晴らしい体験となった。また、子どもたちの親にとっても、今後の家庭教育において活用できる面のある有意義な機会となった。日本の民話などもこのように親子そろって聴かせる機会が得られないものだろうか、という疑問が残った。

(3) 昔話・神話・伝承を語り継ぐ

奈良県で小学校校長を務める原井葉子氏にインタビューをした。原井氏が論文でも述べているように、日本の教育カリキュラムには昔話・神話・伝承を授業の一環として位置付けるのに困難がある。その土地の「おはなしの会」のメンバーが年に数回課外活動の時間に訪れて、子どもたちにお話をする企画もあるが、すべての学校にそうした企画があるとは限らない。教師の昔話や伝承についての認識が低いことも原因であろうが、他のカリキュラムに押されて、教師が多忙すぎるのも一因である。IT技術が飛躍的に発達した今、教師たちはその技術を駆使して、子どもたちに日本由来の伝統ある昔話や伝承を語り継ぐことができる。また、教師自らが語りの技術を身に付け、教室で直接子どもたちに語る事ができれば、それに越したことはない。

日本各地でも「おはなしの会」がボランティア活動として、公民館、図書館、学校などへ出向いて、お話を聴く会を開いている。高齢化等で専門の語り手が徐々に消えていく今、新しい若い語り手の養成が強く望まれている。

奈良のある幼稚園では、定期的に地域の語り部を招いて、お話し会を開いている。しかし小学生になると、学校で授業中に昔話を聞く機会もほぼなくなる。公民館などで会を開いても、最近では就学前の年少の子どもたちが多く集まり、小学生の数は減ってしまったという。小学生は塾や習い事に忙しくて、会には姿を見せなくなるのである。「おはなしの会」の意欲的な活動にもかかわらず、すべての子どもに日本の昔話・神話・伝承を行き渡らせるには、こうした限界が見られる。

(4) 学校教育の重要性 語り部からの提言

オラハリー氏は、アイルランド語の衰退とともに、アイルランドの神話、伝説、民間伝承が消滅するのではないかという強い危機感を抱いている。オラハリー氏とレニハン氏が切々と訴えるように、現代ではメディアを使って広めることは、非常に有効な手段ではあるが、アメリカナイズされたメディアがそれを前面に押し出す気骨があるかどうかの問題である。さらにもっと有効なのは、学校で正式なカリキュラムとして教えることである。そうするとすべての子どもに分け隔てなく浸透していく。

「おはなしの会」が主催する会場にまで出かけて、お話を聴く子どもたちには、ある程度親の意向が働いている。最も望ましいのは、教師が語り部の素質を備え、肉声で子どもたちに「おはなし」をすることである。そして、子どもたちが等しく、心を弾ませるような体験を分かち合えることである。レニハン氏の息子キースが述べるように、両親から子どもたちに伝えることも伝承を守るための大きな力となる。オラハリー氏は日本での講演後、「今後は本を書くのはやめて、カルチャースクール等で親の啓蒙活動をする。」と言った。特にアイルランドでは、母国語のアイルランド語が衰退の一途をたどっているため、状況は深刻である。

アイルランドでは、アイルランド人としてのアイデンティティの形成に、アイルランド語と伝承文学は、教育の場で大きな役割を果たしている。しかし日本人には、昔話や神話に日本人としてのアイデンティティ形成を求めることは少々難しく思われる。アンケート結果からもわかるように、昔話をあまり聴いたことのない大学生には、伝承文学が日本人の文化伝承に係わるという意識があまりない。漫画やアニメで、日本の昔話を広めるのも一つの手段ではある。「おはなし」もパワーポイントや舞台装置や紙芝居を利用して、視覚的に訴える必要もあろう。しかし、最も大切なのは、教師や「おはなしの会」の方たちの肉声に耳を傾けることである。視覚に頼りすぎると、豊かに想像する力は生まれてこないのではないだろうか。

(5) 新たな「伝承文学」

伝承文学教育がかなり制度化して成り立っているアイルランドの状況の有する意味・意義は、さらにブルターニュを見ることによってより深く理解できる。ブルトン語の衰退は第一次世界大戦が契機となっており、その衰退の歴史も復興運動の歴史も新しい。現地のインタビューでも、ブルターニュ文化への誇りやノスタルジーは強いが、必ずしも汎ケルト的な意識では考えられていないことが明らかになった。現地の出版社ではブルトン語の絵本なども出版されており、たとえば海底に沈んだ都市「イス」の伝説をはじめとする伝承文学作品が、童話や絵本のかたち

で現地の子どもたちに親しまれている。

さらに興味深いのは、ブルターニュの伝承文学に触発された、新たな「伝承文学」を創造する試みである。イギリス人で長年ブルターニュでガイド等を務めているウェンディ・ミュージ氏は、ブルターニュの自然とそこに生きる人々の関係を風土論的に探究し、妖精物語のような短編集を出版している。作品のひとつは、ブレンニリス原子力発電所（現在、廃炉プロセスが最終段階を迎えている）を背景とするものである。ブレンニリスはブルターニュのフィニステール県に、フランスで最初に作られた原子力発電所で、1970年代のブルターニュ復興運動との関係で、さまざまな闘争の舞台ともなった。また同じフィニステール県のプロゴフでも、1970年代に立案され、1980年の激しい闘争を経て、ミッテラン政権によって撤回とされた、もうひとつの原子力発電所の計画があった。ブルターニュにおいては、文化の伝承がいわば地下水脈のような形で、しかし、いままなお生きた形で、政治とも繋がっているようにも見受けられる。

ブルターニュの現地調査はアイルランドの状況を相対化して理解するため、半ば補足的に位置づけたものであったが、はからずも、原子力や自然環境の問題を抱える日本の現状と、その伝承文学教育の実態にとっても、ひとつの参照項となるのではないかと思われる。

まとめ：伝承文学教育の未来へ向けて

アイルランドの学校教育では、アイデンティティ教育の一環として伝承文学に触れる機会が頻回にある。一方現代の日本では、今回実施したアンケートからも読み取れるように、伝承文学を「おはなし」として体験する機会が少なく、日本古来の伝承の継承に対しての意識も低い。しかし今こそ、日本の学校教育においてもアイデンティティ教育の一環として、伝承文学教育を積極的に取り入れ、指導していく力が求められているのではないだろうか。

小学校国語のカリキュラム上は徐々に改善されつつあるようだが、伝承文学教育を民間のボランティアや個々の教員の努力だけに依るには限界がある。アイルランドのように、国の教育制度のなかに、体系的に伝承文学教育を組み込むことが望まれる。また地方自治体も、放っておけば失われてしまう、方言で語られた地方独特の昔話や民話を保存し、生きた形で伝承物語や文化を保護して伝えていくような政策を打ち出す必要があるだろう。

このように、制度化された伝承文学教育が日本でも実現されれば、国民としてのアイデンティティだけではなく、伝統文化の継承や自然環境を尊ぶような価値観が、子どもたちの豊かな想像力とともに、おのずと育成されていくことが期待できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

池田 寛子、Exploring Irish Soul: A Symbolical Reading of W. B. Yeats's *The Contess Cathleen*, *The Yeats Journal of Korea: An International Journal of Yeats and Modern Literature*, 査読有、Vol.48、2016、pp.187-206.

池田 寛子、The Explorations of Ancient Memories: Shadows of Irish Tradition in W. B. Yeats's *The Wanderings of Oisín*, *Journal of Irish Studies*, 査読有、Vol.26、2014、pp.42-52.

高橋 美帆、G.M.ホプキンスの「夕暮れ」に寄せる聖歌、*関大英文学*、査読有、March 2015号、2015、pp.271-288.

[学会発表](計13件)

高橋 美帆、荒木 孝子、福本 洋、竹本 万里子、*アイルランドと日本の民話語りと音楽*、奈良アイルランド語研究会、2016年2月11日、恵文社一乗寺店(京都)

池田 寛子、解説：アイルランドの「語り」の文学、*広島市立大学講演会*、2016年2月8日、広島市立大学(広島)

高橋 美帆、荒木 孝子、竹本 万里子、福本 洋、*アイルランドの物語と音楽とアイリッシュティーと*、生駒おはなしの会・奈良アイルランド語研究会、2016年2月6日、生駒市立図書館(奈良)

高橋 美帆、中村 千衛、荒木 孝子、福本 洋、竹本 万里子、*アイルランドと日本の民話教育*、奈良アイルランド語研究会、2015年10月30日、関西大学(大阪)

池田 寛子、*アイルランドとロマン主義「国民国家」と文学*、イギリスロマン派学会、2015年10月18日、奈良女子大学(奈良)

高橋 美帆、A Re-Reading of 'Spelt from Sibyl's Leaves', *The Gerard Manley Hopkins Society 27th International Festival*、2014年7月23日、Newbridge College(アイルランド)

[図書](計6件)

奈良アイルランド語研究会、*トビーがなくなったほね*、アイルランドフューシャ奈良書店、2016、24

奈良アイルランド語研究会、*トビーのごはん*、アイルランドフューシャ奈良書店、2016、24

奈良アイルランド語研究会、*異界のものたちと出遭って 埋もれたアイルランドの妖精話*、アイルランドフューシャ奈良書店、2015、382

池田 寛子、荒木 孝子、中村 千衛、福本

洋、増田 弘果、他、*ブライアン・メリマン『真夜中の法廷』 十八世紀アイルランド語詩の至宝*、彩流社、2014、339

池田 寛子、他、*アイルランド文学 その伝統と遺産*、開文社、2014、698

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 美帆 (TAKAHASHI, Miho)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70342532

(2) 研究分担者

安川 慶治 (YASUKAWA, Keiji)
関西外国語大学・英語国際学部・准教授
研究者番号：20319651

池田 寛子 (IKEDA, Hiroko)
京都大学・人間・環境学研究所・准教授
研究者番号：90336917

(3) 研究協力者

荒木 孝子 (ARAKI, Takako)
中村 千衛 (NAKAMURA, Chie)
福本 洋 (FUKUMOTO, Hiro)
竹本 万里子 (TAKEMOTO, Mariko)
増田 弘果 (MASUDA, Hiroka)
小立 秀美 (KODACHI, Hidemi)